6.

古代和鉄の郷　兵庫県 但馬　出石･豊岡　Country Walk　2006.5.6.

コウノトリが大陸と日本を結ぶ古代　和鉄の道

幸福を運ぶコウノトリと鉄をもたらした天日槍

朝鮮半島からやってきて　但馬・播磨・近江・若狭などに鉄の足跡を残した「天日槍」

但馬では湖だった豊岡盆地の日本海への出口を開いて平野にした開拓新

そんな天日槍の根拠地がが但馬・出石

コウノトリが舞う大陸と日本を結ぶ和鉄の道

但馬・出石にはそんな古代の痕跡を今も残している

1.　天日槍の国　但馬・出石　　-山を隔てて鉄の王国「丹後」ととなりあう-

2.　4 世紀　「砂鉄」が副葬された出石　入佐山古墳を訪ねて

古代和鉄の郷　兵庫県 但馬　出石・豊岡　Country Walk

2.1.　4 世紀　但馬王権の墓 ？　入佐山古墳群を訪ねる

2.2.　鍛冶屋集落・伊福部神社　界隈　& 天日槍ゆかりの 出石神社・中嶋神社

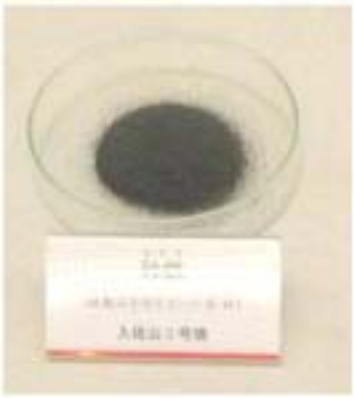
2.3.　コウノトリが舞う大陸と倭を結ぶ古代和鉄の道

新緑の５月　豊岡盆地　コウノトリの郷公園　2006.5.6

3.　古墳時代　但馬の古墳で出土した「砂鉄」の謎をめぐって

まだ製鉄が始まらない時に何に使われたのか

■　参考　但馬　天日槍の国の歴史とコウノトリを訪ねて　2005.6 月　Country Walk ・



「砂鉄」が副葬されていた
入佐山 3 号墳
4 世紀　出石の豪族の墓群
出石　入佐山古墳群
2006.5.6.

昨年 6 月　製鉄関連の神「天日槍」の国　「但馬・出石」を訪ねた時に見た古墳に副葬されていた「砂鉄」。
鉄滓や鍛冶具などが、副葬されるのは 5 世紀以降。そして、日本で本格的な「たたら製鉄」が行われるのは 5 世紀後半である。それに先立つ古墳時代 4 世紀の古墳で　壺に入れられて副葬されていた「砂鉄」。
しかも　それが鉄の国　但馬で・・・・・・。
この但馬では古墳時代　4 世紀には製鉄がすでに行われていたのか・・・・興味津々である。

鉄が日本に伝来して製鉄が開始されるまで千年近くかかり、いまだにその開始については諸説あり、謎である。
そもそも　その後日本で広くたたら製鉄の原料として使われた「砂鉄」は鉄としていつ頃から認識されたか・・・・・

但馬・出石は製鉄技術を持って　新羅からやってきた天日槍が住んだとの伝承の鉄の国。
そして唯一　大陸と行き来して幸せを運ぶコウノトリの飛来地。
絶滅の危機から昨年自然放鳥へとプロジェクトが進むコウノトリが舞う里。
「鉄の伝来をコウノトリ」大陸・朝鮮半島と日本を結ぶ古代の鉄の道に幸せ運ぶりコウノトリが舞う。

この古墳時代　但馬で出土した「砂鉄」が「日本での製鉄開始を解き明かすかもしれない」と興味深々で調べると共に再度　但馬出石の古墳を訪ねました。

1. 天日槍の国　但馬・出石―　古代鉄の王国　丹後とは山を隔てて直ぐ隣り　―

「天日槍」は記紀や播磨風土記に登場する「朝鮮半島　新羅から日本にやってきた伝説のひと」
「天日槍の伝説のあるところ鉄・金属加工の産地あり」

私の頭の中では隣国播磨風土記に書かれた「産鉄の神」であるが、この豊岡・出石では肥沃な豊岡盆地を作った開拓神としての伝承が残っている。

地図を開いてみれば判るのですが、豊岡・出石は円山川の河口に近い盆地で、四方をすっぽり山に囲まれ、唯一北　瀬戸・津居山の狭い岩山の間から日本海へ円山川が流れ出る。

縄文の海進の時代には奥へ深く入った海だったという。

大昔の豊岡盆地は南から流れ込む円山川で泥海・湖であったが、朝鮮半島からやって来て　但馬・播磨・近江・若狭などに鉄の足跡を残した天日槍の技術集団がこの地に留まり、北側河口近くの瀬戸・津居山の間の岩山を取り去り、濁流を日本海に流し落してこの肥沃な豊岡盆地(平野)を作ったという。

出石の鉄関連地と丹後国
製鉄遺跡との位置関係

このような大規模な工事には鉄器を使った技術が必須であり、天日槍を祖先として信奉し鉄器技術を持った渡来人の活躍する姿がこの開拓神の伝承としてこの地に根付いたのであろう。

その天日槍を信奉する渡来の技術集団の本拠地が豊岡盆地の南端の山裾が出石である。

鉄の国　伯耆・播磨・丹後と接して、この但馬に流れ込む川からも円山川を含め、砂鉄が多く取れ、出石付近まで船が入ったという。

この天日槍がやってきたのは３世紀卑弥呼の時代に近いらしく、この出石の山裾にはこれらの集団が残した古墳群や横穴墓など弥生後期や古墳時代からの遺跡群が残っている。（入佐山古墳群　袴狭遺跡　タヌキ谷古墳群　森尾古墳などで　いずれも渡来人集団が居た痕跡が見られる）

袴狭遺跡出土　船団の線刻画

出石の街を見下ろす丘陵地 入佐山の尾根の上に古墳時代にこの地を治めた豪族の墳墓と見られる古墳群があり、その一つ 4 世紀頃の方墳　入佐山三号墳には刀・武器・鏡など数々の品と共に「砂鉄」が副葬されていた。また、出石神社の北の丘陵地の山裾の袴狭遺跡出土の平安前期の木簡からこの地に金属の渡来系技術集団「秦氏」の存在が裏付けられる一方、入佐山の直ぐ傍で出石川から分流する奥山川の分流地に「鍛冶屋」の地名が残っており、さらに 1㎞ ほど奥に古い由緒を持つ「伊福部神社」がある。

この地では　まだ　製鉄遺跡の痕跡は見つかっていないが、出石神社に伝わる天日槍伝承などと併せて考えるとこの地が古代製鉄との関係がうかがえ、新羅からの渡来系技術集団または交易集団の本拠地であったと思われる。

3 世紀後半～4 世紀　森尾古墳
刀剣・鉄工具・玉類と共に正始元年の三角縁神獣鏡が出土

但馬一宮　出石神社
祭神　天日槍

日本でも最も古い部類の砂鉄を使った製鉄の痕跡が見つかる隣国丹後の遠所遺跡は 5 世紀後半である。
ちょうど入佐山古墳で「砂鉄」が副葬された 3 世紀後半から 4 世紀にかけては　軟鋼材の鑿（サク・のみ）切り加工主体の原始鍛冶から高温の本格鍛冶への移行期であり、また　朝鮮半島と日本の交流が活発であった時代。
副葬された砂鉄は渡来の技術集団が日本での製鉄の夢を賭けて　持ち込んだのだろうか?????

■　天日槍　伝　承

古事記、

新羅の王子であった天日槍は赤い玉の化身として日本から来た女性と結婚したが、だんだん高慢になった王子が妻をののしるようになり、この女性はこつそり日本へ帰ってしまう。
彼女を忘れられない天日槍は海を渡って、妻の故郷難波に向かうが、海の神に妨害されて果たせず、迂回して但馬国に停泊。結局、但馬の地の娘を娶った。
天日槍が持ってきた神宝を玉津宝といい、八種であった

日本書紀

新羅の王子天日槍が 7 種の神宝を持って日本にやってきて、但馬国におさめた。
初め天日槍は舟に乗り播磨国にやってきて穴栗邑にいた。
天皇に「お前は誰か　何処の国の人か」と尋ねられ、「新羅の王子です　日本に聖王がおられると聞いて国を弟に譲り、やってきました」と答え、天皇から「播磨国の穴栗邑と淡路島の出浅邑の二つに自由に住むように」といわれた。
「自分の住む所は許してもらえるなら、諸国を巡り歩いて　自分で選びたい」と許しを貰い、宇治川を遡って　近江の国　次に若狭を経て但馬国に居を定め、土地の娘を娶る。そして、曾孫が田道間守である。

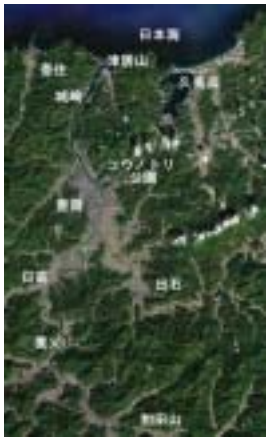
播磨風土記　**御方の里の項**

天日槍と大国主命が支配地を巡って争われた時、葦草を三条　足に付けて投げあいをされ、落ちた所を支配地にしようということになった。天日槍の葦草はすべて但馬に落ち、大国主命の葦草は、養父郡と気多郡とこの村にそれぞれ落ちた。だからこの地を三条（みかた）という。また、天日槍は但馬に行き　出石を本拠とされた。

このほか、播磨風土記には天日槍が揖保の里　奪谷・伊奈加川・波賀の村・糠岡の項など　数多くの里の項に登場する。いずれも鉄と関係深い里である。

2.　4 世紀　「砂鉄」が副葬された出石　入佐山古墳を訪ねて　　2006.5.6.

古代和鉄の郷　兵庫県 但馬　出石・豊岡　Country Walk



但馬国を流れ下って日本海へ注ぐ円山川　和田山周辺で　2006.5.6.

天日槍の鉄の国に出土した「砂鉄」が気になって仕方なし。4 世紀の砂鉄????そんな　ばかな・・・・・
砂鉄が 4 世紀にあれば、日本の製鉄はもつと早く始まっていたはず。本当だろうか・・・・
「砂鉄」の出土した入佐山古墳は「砂鉄」出土にふさわしい古墳だろうか・・・・。
そして、地図で知った伊福部神社や鍛冶屋の集落。
和鉄の痕跡はあるのだろうか・・・・・。
家内は昨年　秋に放鳥されたコウノトリにイメージを膨らませている。
鉄の里に舞うコウノトリ　これも是非見たい。

雪が消えたら　行こうといいながら　のびのびになつていた「天日槍の鉄の国　但馬・出石」に出かけました。何度も出かけた事のある「出石」でしたが、「城下町と出石そば」でない目的で行くのは前回の「砂鉄」を見つけたツアー「古代　天日槍の国」を除くと初めて。
地図で調べた入佐山は出石城の直ぐ東の丘陵地　旧京街道が出石の街に入る入口出石高校の裏山で尾根筋が公園になっているというが、行ってみないと詳しいことは全く判らない。
いつものとおり風来坊の Country Walk でしたが、今まで知らなかった「出石」の顔と日本でのたたら製鉄開始の謎が自分なりに整理が出来る旅となりました。
残念ながら入佐山古墳出土の「砂鉄」が展示されていた出石古代学習館へも再度訪れて、出石のたたら遺跡について調べたかったのですが、連休の休館日でした。

神戸から車で山陽道・播但自動車道と北播磨の山間　生野峠を越えて和田山盆地に出て、京都・福知山からの国道 9 号線と合流して日本海へ流れ注ぐ円山川の橋を渡るともうそこは但馬。神戸から 2 時間たらずである。
国道 9 号線と別れ、直ぐに円山川に沿って山間を北にすすむと直ぐ日高町。
現在はこの地も豊岡市。
山間の日高町を抜けると、周囲を丘陵地や山に囲まれた平野部の真ん中を円山川が流れ下る豊岡盆地に入る。
豊岡の街へはそのまま川に沿って北へ下るのですが、出石へはこの盆地の縁の丘陵地に沿って東へ。
円山川に注ぐ出石川の橋を渡り、川に沿って南へ戻ると出石の市街地。
カーナビが勝手に道を指示して盆地の中の道を出石まで運んでくれる。

和田山の町で円山川を渡って出石へ

5 月の連休で出石の街中は新緑の「出石城」と「出石そば」を訪ねる人たちでいっぱい。
昨年放鳥された豊岡コウノトリ公園へも出石から北へ 15 分ほどでいけるので人出が多い。
出石は周囲を山でかこまれ、南の丘の出石城を正面にその北側に碁盤の目で広がる街並みがすっぽり収まっていてわかりやすい街であるが、「入佐山」は訪れたことなく、地図でしっかり入佐山の位置をインプットする。出石城址と街並みの中心に時を告げる辰鼓櫓があり、昔の城下町の風情を残す街並みが広がっている。
といっても、まあ　今は有名になった「出石そば」のテーマパークといった風情。
数多くの蕎麦屋・土産物屋が立ち並ぶ。周囲を緑の山に囲まれ、ゆったりとした街である。

城下町　出石界隈　　出石城　辰鼓櫓　　入佐山下の旧京街道　2006.5.6.

豊岡盆地の一番南の端でまた小さな盆地になった地形の中、市街地の南・東・北側を弧コの字型に山で囲まれ　西側を出石川が流れる。
市街地の正面　南の丘陵地の中腹に出石城があり、コの字の南東角の丘陵地が入佐山。
入佐山の丘陵地と城址のある南の丘陵地との間の狭い谷あいを東から旧京街道が街に入ってくる。
そして　もう一つの北東の角に出石神社がある。
街中を避けながら出石高校を目印に市街地の東端の山裾に沿って南へ。市街地の南東角近く　右手に明治館の古い建物の道の反対側の丘陵の端に入佐山公園入口の案内板があり、直ぐ隣に臨時の車置き場。ラッキーである。

入佐山古墳群のある入佐山公園登り口とその南側旧京街道沿いの出石高校　　2006.5.6.

2.1.　4世紀　但馬王権の墓 ？　入佐山古墳群を訪ねる

全く情報がなかったので、草ぼうぼうの雑木林の中に古墳が眠っているのかと思いましたが、登り口の案内板に古墳があることが書かれていたので、間違いなし。登って見るとよく整備された遊歩道が古墳のある尾根筋を巡り、そのいたるところに歌碑が立てられていました。また、登り口の尾根を南に回りこむと小さな川沿いの旧京街道が東西に走り、道沿いに出石高校がありました。　出石城の市街地はこの京街道を川に沿って西へ 500m ほどのところですが、城周辺の雑踏が嘘のように静かな街筋である。

登り口に戻って、よく整備された山道を登ってゆく。外から来たものにはよく判らないが、但馬の国では「入佐山」は良く知られた名所のようだ。登り口の案内板にも　但馬の歌枕「入佐山」　城崎・生野銀山と並ぶ但馬の名所と書かれていた。登り口から尾根筋を上りだすとそこはもう誰も居ない山の中。

幅の狭い尾根筋が新緑につつまれた林の中に続いている。

入佐山の散策路から見る出石の街並　　2006.5.6.

道のあちこちに歌碑やお地蔵さんが置かれ、出石の街の人達の散策路なのだろう。

雑木林の間から、碁盤の目に区切られた出石の街並みが見える。周囲の山々をバックに四角い家並み全体がすっぽりと収まり、その中央にシンボル辰鼓櫓が直ぐそこに見える。

出石の　　街をゆったり、見るにはこの散策路が一番である。

15 分ほどで尾根筋の上に出たところに展望所があり、出石の街が見下ろせる。その傍らに「入佐山 1 号墳」の小さな立て札が立っている。

入佐山古墳群の散策ルート

この休憩所の場所が 1 号墳のようである。登り口の案内板には前方後円墳と書かれていましたが、もうその痕跡はない。

入佐山一号墳周辺　　2006.5.6.

資料によると標高約 90 メートルのこの入佐山の狭い尾根筋には弥生時代後期から古墳時代前期いたる墳墓群が点在。尾根筋をつなぐ小さな 3 つのピーク部にそれぞれ古墳があり、尾根筋には 50 を越える小さな木棺直葬墓が点在している。このうち　一番奥のピークにある 3 号墳が発掘調査され、時期のほぼ同じ二つの墓壙が一部重なさつて存在し、第一の墓壙では赤く塗られた木棺の中　頭の直ぐ上に土器と共に砂鉄　鉄鏃　鉄斧が置かれ、体の右側に四獣鏡と太刀　左側に割れた方銘四獣鏡と刀・剣・ヤリカンナ　足元には鉄鏃と槍がおかれ、棺の直ぐ左にも鉄剣が置かれていた。この墓壙に重なるもう一つの墓壙はむしろこちらが古墳の中央にあり、先の墓と考えられるが、第一の墓壙で一部壊されていて、詳細はわからないが、ガラス玉が出土している。
副葬品からどちらも 4 世紀後半の墓と見られている。
他の古墳や木棺直葬墓については詳細調査資料がないので良くわからない。この 3 号古墳が他の 2 つの古墳より先に作られたと考えており、その副葬品などから　鉄の技術を有する渡来系のこの地を治めた豪族と考えられている。また　この尾根筋の直ぐ近く　南東の丘陵の端に但馬最大の円墳茶臼山古墳があり、一つの古墳群を形成している。

但馬王権の墓か?　　入佐山古墳群　　2006.5.6.

出石市街地の東南隅に隣接する丘陵地の尾根の上に点在

入佐山１号墳　入佐山前方後円墳??

入佐山 2 号墳　径 15m の円墳

入佐山 3 号墳　砂鉄と共に数々の遺物が副葬　高さ 3.5m　36mX23m の方墳

但馬王権の墓か?　　入佐山古墳群　　2006.5.6.

4世紀後半　古墳時代の方墳　入佐山　3号墳　　2006.5.6.

歌碑がところどころに配された尾根筋の古墳をたどる遊歩道の奥
静かな木立の中　尾根筋の一番奥　一番高い所に高さ数ｍの方墳辺の痕跡が見える
古墳群の中で一番古い最初の族長の墳墓と見られ、二つの木棺が収められている。
この第一主体の木棺の枕元に砂鉄が土器に入れられて置かれ、周りに刀剣・鏡・武器・玉類などが副葬
朝鮮半島からこの地へやってきた鉄の技術集団の長と考えられる

狭い尾根筋をさらに進むと第2のピークがみえ、階段状になった遊歩道を上にあがるとそこに第二古墳の立札があり、道脇に歌碑が建っている。古墳というよりも尾根筋の少し出張ったところといった感じである。
そして　さらに奥へ雑木林の中を登ってゆくと雑草生い茂るこんもりした丘にぶつかり、その前に3号古墳の立札。
「これが　砂鉄の出た3号墳??　どこが　古墳だろう???」一瞬わからなかったのですが、立札のところから林の中を左へ回り込むと尾根筋の道よりも一段高くなった方墳の台形の縁が見え、古墳と判る。尾根筋の上にきっちり直線状の四辺に囲まれた古墳であるが、すでに埋め戻されていて雑草が生えているのみ．ここにも傍らに入佐山の歌碑が建っているのみ。

入佐山　　2号墳

入佐山　　3号古墳の周辺　　2006.5.6.

この古墳がどんな古墳なのか記した案内板があってもいいと思うのですが、興味がないのか　全くなし。
古墳時代　この入佐山に葬られた豪族の墓で、初めて副葬された砂鉄が見つかっている。
（　関東一本桜南遺跡　ほぼ　同じ時代の竪穴住居の中で壺に入れた砂鉄　また　3 世紀後半の関東の沖塚鍛冶遺跡で鍛冶場周辺から砂鉄が見つかっている。）
よほど　大事なものであったに違いないが、この砂鉄が何を意味し、また　どこからもたらされたのか　よく判らない。渡来系鉄の技術集団の痕跡の残る地でその族長の墓に副葬された「砂鉄」。
渡来の時に朝鮮半島の先端鍛冶技術の象徴として持ってきたのかも知れない。
この古墳時代朝鮮半島ではすでに製鉄が行われ、周辺諸国へ鉄素材の供給が行われていた。
砂鉄が明確に朝鮮半島で鉄材料として認識されていたかどうか判然としないが、3 世紀後半　新新羅の大規模な製鉄遺跡隍城洞遺跡では砂鉄と見間違われたほどに細かく砕かれた鉄鉱石粉が脱炭剤として使われ、精錬炉や鋳鉄塊などと共に見つかっている。
まだ、製鉄技術のなかった日本。鉄素材の供給を朝鮮半島に求め、それを　武器・農耕具に鍛冶加工して日本の国づくりが始まった時代である。北九州・大和を始め、各地の豪族が鉄の技術を求めて、朝鮮半島諸国と交流。
一方　朝鮮半島は戦乱の時代。多くの人達が技術と共に戦乱を逃れて日本にやってきた。そして、本格的な鍛冶加工から日本での製鉄開始へと時代が動いてゆく。次の時代　5 世紀後半には砂鉄を製鉄原料としたたたら製鉄が始まることから、鉄の技術集団の族長と思われる墓に副葬された「砂鉄」は新しい製鉄技術の象徴なのかも知れない。

入佐山の南山麓　出石高校周辺

そんな「砂鉄の謎」に思いをはせながら、緑につつまれた尾根筋を引き返して、出石高校の横に下りてくる。
入佐山の丘陵と南の山々との狭い谷間の小さな集落の中を旧京街道が出石の街へ抜けていく。静かな昔の街道筋のたたずまいの残る集落の上に入佐山の緑がかぶさっている。そんな山裾を緑を楽しみながら川に沿って西に 10 分ほど下ると出石城址の前に出る。
城址公園の中で「出石そば」を食べて、午後は地図で見つけた鍛冶屋集落　伊福部神社を探しながら、天日槍の出石神社・袴狭遺跡・中嶋神社と古い鉄の痕跡を訪ねながら、コウノトリ公園へ行く。

入佐山の南山麓　旧京街道　界隈　　出石高校周辺　　2006.5.6.

2.2.　鍛冶屋集落　伊福部神社　界隈　&　天日槍ゆかりの 出石神社・中嶋神社

「出石」は渡来の製鉄関連神「天日槍」伝承の街。　新羅の皇子　天日槍が鉄の技術を持ってやってきた時代　日本は古墳時代　大和が日本統一に向かって歩み出した時代である。出石入佐山の古墳から数々の鉄製の武具・刀剣と共に「砂鉄」が副葬されていたことが、益々この伝承に信憑性を与える。
なぜ　出石なのか・・・・確かに朝鮮半島から風に乗って日本海沿岸を伝えば　円山川河口　奥深く天然の良港「出石」にいたる。また、円山川をそのまま南に遡れば、　天日槍と大国主命が国を争った北播磨の製鉄地帯。また　出石の直ぐ東の山岳地帯は大江山。　この大江山の山塊から日本海へ流れ下る川筋は「鬼」や「羽衣」伝説の鉄の国「丹後」である。
周囲を鉄の国でかこまれた天然の良港であった出石が鉄の技術伝来の上陸地点だっただけであろうか・・・・出石には製鉄遺跡はないのだろうか・・・・・
そんな疑問で地図の上で見つけた出石鍛冶屋　伊福部神社の地名。また　天日槍伝承の出石神社・中嶋神社にも・・・
入佐山古墳に副葬された「砂鉄」が展示されていた出石古代学習館へ行けば　出石の製鉄遺跡についてももっとわかるかと訪ねましたが、残念ながら休館でした。

■　出石川の支流　奥山川沿いの出石　鍛冶屋と伊福部神社（出石市中村）

出石城址や入佐山の直ぐ西南　出石盆地の南端の山にかかる所で出石川が本流と奥山川に分岐するＹ字合流点の三角形の場所が鍛冶屋集落。そしてそこから西側の奥山川に沿って　数分南へ遡った丘陵地の山裾に伊福部神社がありました。

集落の中　二つの川に沿って　Ｙ字に道も分かれ、その分岐の角に出石鍛冶屋郵便局の名前がありました。ここからさらに少し南へ遡った道沿いに大きな樹木に囲まれた伊福部神社がありました。

拝殿前に堂々とした杉の大木がそそり立っていて台風でだいぶ痛めつけられたようであるが、樹齢１０００年の神木と云い、この神社の古さを物語っている

出石市中村　伊福部神社　　2006.5.6.

伊福部神社　社殿とその左手にある樹齢 1000 年という杉のご神木　　2006.5.6.

古ぼけてほとんど読めなくなつた神社の由来を書いた額によると

祭神　素盞嗚尊　配祀　天香山命、伊福部宿祢命

天平十九年（７４７年)、伊福部連其祖天香山命を祀ると云う。

また、大生部兵主神社とも伝えられ、大生部兵主神社を弘原荘中村に鎮座し、これを大生部神社と崇めたと『日本書紀』にあると云う

出雲の製鉄神　素盞嗚尊を祭り、また、古代鉄の氏族　尾張　息長氏の一族　伊福部氏の祖天香山命の名も見え、鉄と官憲深い神社であり、鍛冶屋の地名も含め、この奥山川沿いに古代から鉄の技術集団が居たのだろう。

周辺で　鉄の痕跡について　聞いてみましたが、もう　全くわかりませんでした。

■　出石神社と中嶋神社　　-　天日槍伝承　-

天日槍を祭但馬一宮　出石神社

天日槍の曾孫　お菓子の神さん　田道間守を祭る中嶋神社

■　資　料【天日槍　伝　承】

出石神社由緒

天日槍命は、新羅国王の王子であり、日本に渡来されたとし、その事蹟は記紀のほか『播磨国風土記』『筑前国風土記』逸文等にうかがうことができます。天日槍命のご子孫には、田道間守命や、神功皇后がいる。出石神社社伝の『一宮縁起』には、谿羽道主命と多遅麻比那良岐と相謀り、天日槍命を祀ったと伝え、諸書によると遅くとも八世紀のはじめ頃にはすでにこの地で祭祀がおこなわれていたことがうかがわれる。

天日槍命は泥海であった但馬を、丸山川河口の瀬戸・津居山の間の岩山を開いて濁流を日本海に流し、現在の豊沃な但馬平野を現出され、円山川の治水に、また殖産興業に功績を遺された神として尊崇を集めている。また、鉄の文化を大陸から持って来られた神ともいわれている。

古事記、

新羅の王子であった天日槍は赤い玉の化身として日本から来た女性と結婚したが、だんだん高慢になった王子が妻をののしるようになり、この女性はこつそり日本へ帰ってしまう。彼女を忘れられない天日槍は海を渡って、妻の故郷難波に向かうが、海の神に妨害されて果たせず、迂回して但馬国に停泊。結局、但馬の地の娘を娶った。天日槍が持ってきた神宝を玉津宝といい、八種であった

日本書紀

新羅の王子天日槍が７種の神宝を持って日本にやってきて、但馬国におさめた。初め天日槍は舟に乗り播磨国にやってきて穴栗邑にいた。

天皇に「お前は誰か　何処の国の人か」と尋ねられ、「新羅の王子です日本に聖王がおられると聞いて国を弟に譲り、やってきました」と答え、天皇から「播磨国の穴栗邑と淡路島の出浅邑の二つに自由に住むように」といわれた。「自分の住む所は許してもらえるなら、諸国を巡り歩いて　自分で選びたい」と許しを貰う。

そして　宇治川を遡って　近江の国　次に若狭を経て但馬国に居を定め、土地の娘を娶る。そして、曾孫が田道間守である。

播磨風土記

大国主命はここでは別名の葦原志許男（あしはらしこお）命として登場する。

御方の里

天日槍と葦原志許男は、勝負がつかないので、山の上から三本の矢を射て、落ちた所を支配地にしようということになった。天日槍の矢はすべて但馬に落ち、葦原志許男の矢は、養父郡と気多郡に落ちた。

そこで、天日槍は但馬の出石を本拠とし、葦原志許男は養父神社と気多神社に大己貴命（おおなむちのみこと）として祀られたという。

このほか、播磨風土記には天日槍が数多くの里の項に登場する。いずれも鉄と関係深い里である。

【揖保の里　粳谷　伊奈加川　波賀の村　縣岡　の　項など】　**「筑前国風土記　逸文」「古語拾遺」にも記述がある**

2.3.　コウノトリが舞う大陸と倭を結ぶ古代和鉄の道

新緑の５月　兵庫県豊岡盆地　　コウノトリの郷公園　　2006.5.6.

空を舞うコウノトリの写真取りたいのですが、今回はかなわず。
一時間ばかり　家内と二人　コウノトリを眺めていました。
広い田圃に囲まれた自然の中に放鳥されたコウノトリ
自然の中ですくすくと育っているのがみられました
かつて　鉄のロマンを乗せて　この鉄の道の大空を行き来したコウノトリ
また、この但馬と大陸とを広く行き来するのは　いつだろう

昨年　自然へ放鳥されたコウノトリ　2006.5.6.

難しい繁殖　かわいそうにメスが擬卵と知らず抱き　オスがサギを追い払っていました
しかし、最近の新聞によると　この５月　このツガイが別のコウノトリが産んだ卵を温め、雛が誕生。
このコウノトリが自然の中での成長し、自然の中に巣立っていくことを見守るという。

コウノトリが舞う大陸と倭を結ぶ古代　和鉄の道　　兵庫県豊岡盆地 コウノトリの郷公園　　2006.5.6.

3. 古墳時代　但馬の古墳で出土した「砂鉄」の謎をめぐって

まだ製鉄が始まらない時に何に使われたのか

精錬鍛冶と製錬をつなぐ渡来技術の鍵がこの「砂鉄粉」
この技術習得で本格的な鍛冶生産そして製鉄が始まった

4 世紀後半の出石入佐山三号墳では　鉄製の数々の武具や刀と共に木棺の頭の所に砂鉄が土器に入れられて副葬されていた。日本で製鉄が始まる 5 世紀後半以前の古墳時代にこの様な「砂鉄」が出土した例を調べました。
5 世紀になると数々の鍛冶具と共に鉄滓が副葬されることが数多く見られるが、それ以前を含めても「砂鉄」が副葬された例はない。しかし、古墳時代前期　朝鮮半島から鞴・羽口による高温創業の本格的な鍛冶技術が伝来し、精錬鍛冶を伴う高度な鍛冶加工による実用鉄器が広く使われ始める時期と符合して　その例はさほど多くはないが関東にも「砂鉄」の痕跡が見える。
また、製鉄技術伝来のルートでしかも活発な交流がある朝鮮半島にも砂鉄ではないが、鉄鉱石粉の例がある。

一本桜南遺跡
竪穴住居より砂鉄が出土

沖塚製鉄遺跡
砂鉄が鍛冶滓と共に出土

入佐山古墳
砂鉄を副葬

古墳時代前期に出土した「砂鉄」の例　千葉県文化財センター「研究連絡誌　25 号」ほかよりまとめ

系別	千葉県白井市	群馬県　伊勢崎市	千葉県八千代市	千葉県旭市	千葉県　佐貫	群馬県吾妻川	兵庫県豊岡市
遺跡名	一本桜南遺跡	西太田遺跡	沖塚製鉄遺跡	外房海岸浜砂鉄	佐貫町で採取	群馬県吾妻川	入佐山 3 号墳
推定年代	古墳初頭 3 世紀	古墳後期	古墳初期 3 世紀後半	現代	現代	現代	古墳中期 4 世紀後半
出土量	520g		>2kg				150g
出土の状況	竪穴住居跡 小型壺形土器	集落遺跡の土コウ	鍛冶遺跡 炉の埋め戻し土				墓壙棺内 副葬 数々の鉄武具・ 鏡と共に土器内に
全鉄分	60.0	59.8		48.1	60.76	51.66	
FeO	27.0	19.83		26.2	32.48	24.45	
Fe2O3	55.8	63.4		39.2	50.74	64.7	
SiO2	2.18	2.56		2.1	1.98	9.0	
Al2O3	3.21	2.76		2.6	1.44	3.8	
CaO	0.60	1.11		1.4	0.28	0.82	
MgO	1.71	1.43		5.1	1.87	2.9	
MnO	0.43	0.48		1.3	0.90	0.54	
TiO2	4.83	7.09		10.2	10.16	5.3	
Cr2O3	0.007	0.045		0.12	——	0.037	
S	0.015	0.019		0.051	0.033	0.027	
P2O5	0.072	0.31		0.296	0.376	0.238	
C	0.18	0.03		0.042	——	0.074	
V	0.16	0.29		0.17	——	0.35	
Cu	0.003	0.004		0.005	——	0.038	

千葉県白井市印旛沼の台地にある古墳時代初頭の一本桜南遺跡の竪穴住居群の一つから　小型の壺にいれた砂鉄が見つかっている。砂鉄は顕微鏡観察による形状や分析結果などから、浜砂鉄ではなく川砂鉄のようである。しかし、他の多くの住居からは全く砂鉄の痕跡は見つかっておらず、砂鉄と認識して意図的に保管されていたと

考えられるが、その用途はわからない。
また、この遺跡から南東約 7㎞ ほどの精錬鍛冶などの本格的な鍛冶加工の始まりを示す 3 世紀後半の製鉄遺跡沖塚鍛冶遺跡からは羽口痕を有する鍛冶炉や鉄滓・鉄片や鉄塊などと共に大量の砂鉄が見つかっている。製鉄遺跡であり、この砂鉄は製鉄原料と考えると量的には少なすぎる。
しかし、古墳時代の初期の遺跡から「砂鉄」が出土したこの千葉県の台地一帯は但馬出石と同様古代からの大製鉄地帯であり、製鉄との関連が考えられる。
古墳時代初頭　九州博多遺跡での本格的な鍛冶が始まった後、急速に関東にまで広がり、実用鉄器の時代が始まったことがわかる。そして、この急速な鉄鍛冶技術の進歩と呼応して、「砂鉄」が出土している。

朝鮮半島に眼を向けるとこの時代に「砂鉄」が出土した例は見られないが、半島では鉄鉱石を使った製鉄がおこなわれ、日本や周辺諸国に鉄素材が供給されていた。そして新羅の都慶州の隍城洞製鉄遺跡からは砂鉄に見間違うほどの細かく砕かれた鉄鉱石粉が見つかっている。
この細かい鉱石粉は製鉄炉で製造された鋳鉄塊を脱炭精錬するのに用いられていた。

慶州　隍城洞製鉄遺跡

鋳鉄塊の脱炭助剤として使われた鉄鉱石粉

博多遺跡

-高温操業の本格的鍛冶の時代を告げる博多遺跡　羽口

このことから、この頃の製鉄技術を持った技術集団が日本に渡ってきた時に日本で砂鉄に出会って、この脱炭精錬用に砂鉄が使われ始めたと考えられないだろうか
また、この但馬の砂鉄　本当は朝鮮半島の「鉄鉱石粉」でなかったか・・・・

精錬鍛冶と製錬をつなぐ渡来技術の鍵がこの「砂鉄粉」
この技術習得で本格的な鍛冶生産が始まった

そんなイメージをこの砂鉄に今強く抱いている。

「砂鉄の出現によって、日本に砂鉄を製鉄原料とした製鉄が始まった」との考え方もあるが、その量・出土の状況からは製鉄が始まったとは考えにくい。

- ■　この頃　新羅隍城洞製鉄遺跡では鋳鉄の脱炭精錬の助剤として　大量の鉄鉱石粉がみつかつており、この使い方の流れが日本に伝来したのではないか・・
- ■　朝鮮半島で作られた鋳鉄塊・鋳鉄素材が日本に供給され、それを精錬して鍛冶加工する一連の鉄素材製造フロセスとその供給ルートが固まり、日本での大量の実用鉄器需要を支えたのでないか・・・・

この「砂鉄」が新しい製鉄技術の伝来
鞴・羽口による高温創業による本格的鍛冶の時代到来の象徴 国内での鉄生産探索の象徴ではないだろうか・・・・・

ひょっとすると　但馬　入佐山の副葬「砂鉄」は朝鮮半島の製鉄技術集団が日本に持ち込んだ本格鍛冶技術の中心にあったのかも知れない。

その後　日本で展開された「たたら製鉄の神業的な温度と雰囲気コントロール」そして「玉鋼と共に大量に発生する銑鉄塊とその処理法」を考えるとまさにこの一連の技術習得（鋳鉄製錬と製鋼）が連結して習得されねば　たたら製鉄は誕生しえないことが見えてくる。

私見ではあるが、この理解と技術習得に 1000 年かかったと理解している。
まさに物づくりの粋であり、現在の近代製鉄においてもこの製錬・製綱の 2 段階プロセスの枠組みは今も変わっていない。
そう　考えるとその後の日本での製鉄開始の前夜　製鉄原料・製鉄現場や製鐵炉が発見されないにもかかわらず、数多く発見されるようになる鍛冶工房での大量鉄滓と見つからないと製鉄工房の謎とも合致する。
この砂鉄の助剤としての使い方から徐々に鉄塊が小さくなって「鉄の種」に添加される「砂鉄」が主原料に代わって行き、「たたら製鉄」の誕生になったのではないか・・
そんな風に今は考えている。　その一番の技術理解の時期がこの古墳時代の「砂鉄」にあるのではないか・・・・
みた目の技術習得ではどうにもならぬ製錬鍛冶技術の習得が数多くの渡来技術集団と一緒になって始まった。
その痕跡が　鉄の国但馬出石の入佐山に副葬された「砂鉄」
新羅の皇子だったという天日槍の製鉄伝承　新羅と関係深い金属技術集団秦氏の痕跡　そして伊福部の痕跡
そんな出石の鉄の痕跡が延々と朝鮮半島に延びる製鉄黎明の時代の和鉄の道を伝えている。
長年にわたり探し続けた製鉄技術の謎がこの砂鉄を契機に解明されていったと考えたい。
まさに　古代　朝鮮半島と倭を結ぶ「和鉄の道」でのエポック　メーキング的な出来事であったと考えたい。

自分なりに　そんな風に今は考えているが、異説を含め、検証すべき考え方を書きに記しておく。

1. たたら製鉄の前駆的な鉄塊の精錬鍛冶の脱炭剤として反応促進に使われた。
   この古墳時代の始まりと共に日本では本格的な実用鉄器にはいり、大量の鉄器か使われ始める。
   この鉄器製作のための精錬鉄素材は鋳鉄塊や板状・棒状鋳鉄素材として日本に持ち込まれた
2. 国内でプレたたら製鉄が始まり、大量に鍛冶工房に鋳鉄塊が持ち込まれ、その精錬反応助剤として砂鉄が用いられた
3. 本格鍛造鍛冶鍛冶素材の鍛造接合剤の可能性
4. 玉などの加工用研磨粉

日本で鉄が伝来してから製鉄が始まるのに約 1000 年かかったのはなぜか・・・・
鉄が開始される前夜　多くの古代鍛冶工房で製鉄の始まりを示す精錬滓や製錬滓が数多く見つかるのにいまだに製鉄炉や製鉄場がみつからないのはなぜか・・・・
砂鉄は何時から鉄と認識されたのか・・・・・・
そんな古代　鉄の謎にイメージをあたえてくれた　古代和鉄の国　但馬から出土した「砂鉄」

古代の鉄の謎が今回　出石に副葬された砂鉄を調べて行くうちに、なんとなくプレたたらの様子がおぼろげながら見えてきたように思う。
「鉄」と「鋼」は違う。　実用できるのは「ネバくて強い鋼」である。
「（銑）鉄をつくり、そこからさらに鋼を得る」この二つのプロセスを経なければ鋼は得られない。これは今も昔も変わらない。
唯一日本独自の「たたら製鉄」のみが「玉鋼」を一つの工程で「鋼」を得るきわめて難しい業である。
もっとも　たたら製鉄に於いても　大量の「銑鉄」を同時に発生し、この銑鉄を鋼にかえる精錬のプロセスが同時に行われている。 製鉄というと「鉄鉱石」を溶鉱炉に炭と共に入れて、高温でとかせば、簡単に「鋼」が得られると思いがちであるが、今も 2 つのプロセスを経なければ得られない。

古代の水銀や銅などの製造と一番違う点である。
この理解がないと「鋼」の実用鉄は得られない。日本での製鉄の前夜　本格鍛冶の時代といわれるのは　同時にこの技術理解の時代であった。
この製錬・精練に魔法薬のような働きをしたのが「砂鉄」だったのであろう。
脱炭助剤として　銑鉄の溶融脱炭を助ける役割から次第に製鉄原料へと長年にわたる鍛冶炉操業の中で代わって行ったのだろう。
細かい鉄鉱石粉または砂鉄が新しい鉄の技術をもった技術集団と共に日本海の海をわたって、そこから日本での製鉄の突破口が開けたと考える。
そんな大事な「砂鉄」だからこそ　鉄の技術集団の族長の墓に副葬されたのでないか・・・・・・・
この同じ時期　朝鮮半島には役割の明確な砂鉄と見間違うばかりの鉄鉱石粉があつた。
そして　但馬だけと思っていた砂鉄が壺に入れられ大事にされていた形で東国古代関東の製鉄地帯からも出土。

偶然ではない意図的な「砂鉄」
出石の砂鉄は朝鮮半島から海を渡ったものであろうか・・・・
朝鮮半島と日本を結ぶ古代の鉄の道を楽しくさせてくれた但馬　出石　入佐山古墳の「砂鉄」でした。

2006.5.20.　　入佐山の砂鉄のイメージを膨らませつつ
Mutsu　NakaNIshi

■　関連「和鉄の道　Iron Road」 by Mutsu Nakanishi

Country Walk Ⅳ　　但馬　天日槍の国の歴史とコウノトリを訪ねて
http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/walk/4walk08.pdf

From Kobe　　古鉄再生『沸かし付け』の技術」TV 鉄腕 Dash 村で!!　精錬鍛冶を紹介
http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/ mutsu/fkobe0604.pdf

和鉄の道Ⅰ　　丹後の国　もう一つの邪馬台国　大陸と日本を結ぶ鉄の大加工基地　遠所製鉄遺跡
http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/jstlaa11.pdf

和鉄の道Ⅰ　　古代鉄の王国丹後　天女の通った道は和鉄の道　羽衣伝説
http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/jastlaa10.pdf

和鉄の道Ⅱ　　鬼の住む山　大江山
http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/jstlbb06.pdf

和鉄の道Ⅳ　　播磨風土記　和鉄の道【1】　古代製鉄の一大生産地「讃容の里」Walk
http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/4iron01.pdf

和鉄の道Ⅳ　　播磨風土記　和鉄の道【2】　「御方里」周辺
http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/4iron10.pdf

和鉄の道Ⅵ　　石上神宮の国宝「七支刀」の復元展にあわせて物部氏の本拠地　布留を訪ねる
http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/6iron05.pdf

■　参考資料

環日本海歴史シンポジュウム　渡来の神　天日槍
郷堀英司　大澤正巳「一本桜南遺跡出土の砂鉄について」　千葉県文化財センター　研究連絡誌 25 号
村上恭通「倭人と鉄の考古学」
佐々木稔編「鉄と銅の生産の歴史」
京都府弥栄町編「古代製鉄と日本海文化」
第 5 回歴博シンポ「古代東アジアにおける倭と加耶の交流」